



西田 哲也 先生

略歴

- 1992年 日本大学歯学部卒業
- 1996年 日本大学大学院歯学研究科（歯周病学専攻）修了
- 1999年 米国インディアナ大学歯学部Postdoctoral Student Course（歯周病学）修了
- 2007年 日本歯周病学会指導医
- 2009年 日本大学診療准教授
- 2013年 日本口腔インプラント学会専門医
- 2019年 日本口腔機能水学会会長

生活と命を守る歯周病治療ーコロナからインプラントまでー

日本大学歯学部保存学教室歯周病学講座
西田 哲也

多くの日本人の口の中には歯周病を認めることから「歯周病は国民病」といわれています。古くは歯ぐきから膿が出る病気として『歯槽膿漏』と呼ばれ、有効な治療法もないことから不治の病と言われていたこともありました。歯周病が歯槽膿漏と呼ばれていた時代より、現在は歯周病の予防法や治療法は進歩していますが、それでも日本人が歯を失う原因の第1位は歯周病です。

歯周病は、口の中にある細菌（口内細菌）により歯を支える組織が破壊される細菌感染症で、その発症や重症化に生活習慣が深くかかわっていることから生活習慣病でもあります。また、歯周病は口の中だけの問題ではなく、全身に様々な影響を及ぼすことが近年の研究結果で明らかにされています。糖尿病や心血管系疾患、呼吸器疾患などと関連があり、昨今では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）との関連性も明らかになってきました。口の中の細菌が歯周病を引き起こすだけでなく、その細菌が血流や誤嚥によって血管や心臓、肺などに感染し病気を引き起こします。また、歯周病によって口の中に発生した炎症性物質は、別の臓器で発生している炎症を悪化させたり、妊婦であれば早産の原因にもなります。さらには歯周病を引き起こす細菌が、口の中の防御機能を阻害したり、粘膜を破壊することで他の細菌やウイルスを感染しやすくすることも判明し、まさに“口は災いの元”といえるでしょう。

一般的な歯周病は、進行が徐々に進むことから、患者自身も気づきにくく、気づいた時には数本の歯を抜かなくてはならない状態であることもしばしばあります。歯周病は歯一本に起きる病気ではなく口全体の病気です。すなわち、歯周病により歯が抜けると残された歯も十分な機能を果たしにくい状況になっていることから、噛む力（咀嚼能力）が低下します。噛む力の低下は栄養の摂取をしにくくするだけでなく、美味しく楽しく食事をするという生活の質や人生の豊かさにも影響します。また噛む力の低下は、記憶力の低下や認知症の発生に関係しているともいわれています。

歯を失い、歯ぐきや骨が弱くなることで口の機能が低下するのが歯周病ですから、それらを回復させる治療は大切な治療となります。口の機能、すなわち咀嚼機能を回復させる主な治療は歯を補う治療で補綴治療といい、特に抜けた歯を補う治療を欠損補綴といいます。欠損補綴の種類はブリッジ、入れ歯、インプラントの3つの方法があります。ブリッジや入れ歯は、残っている歯や歯ぐきに抜けた部分の歯の負担を分散させる、不自然な治療法です。一方、インプラント治療は他の治療と異なり、残された歯に負担をかけず、自然な形に近い状態で噛む力を回復させることから、歯周病治療では理想的な欠損補綴の方法といえます。

今回、歯周病と全身との関連性や歯周病治療の一環としてのインプラント治療について、最新の知見や症例を紹介しながら、歯周病治療の大切さについて講演を致します。本講演が、皆様の健康維持と増進、豊かな生活に結び付けば幸いです。